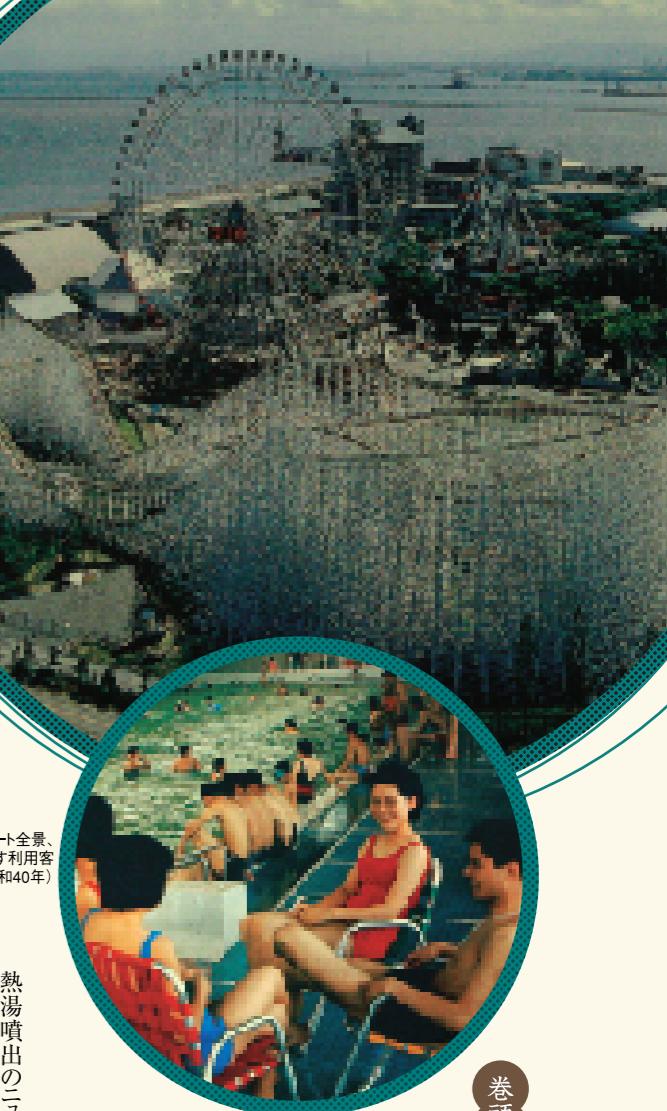


# 長島観光開発物語

年間来場者約1,300万人を数える行楽施設「ナガシマリゾート」。約100万平方メートルの敷地内に「ナガシマスパランド」や「なばなの里」、「ジャズドリーム長島」などを有し、開業から今年で47年が経過した。老若男女が訪れる「ナガシマリゾート」には、人々を魅了してやまない非日常空間がある。時代と共に進化を続ける姿を紐解く。



上:ナガシマリゾート全景、下:屋内プールで過ごす利用客(昭和40年)

## 水資源に望みを懸けて 荒野に挑んだ男たちの夢

今から遡ること約50年。木曽川・長良川・揖斐川が伊勢湾へと流れデルタ地帯に挑んだ男たちがいる。天然ガスの掘削を試み富山からやった大谷天然瓦斯株式会社代表取締役社長大谷伊佐父子である。作業を開始して数年余、天然ガスは得られなかつたが採掘した井戸からは30℃の水が噴出。これまで4基の井戸を手がけた大谷父子は、豊富な水資源に新たな夢を抱く。

——長島の地に天然温泉を開発することだ。

昭和38年6月、大谷父子は数人の若者たちと共に新たな井戸の穿鑿(せんさく)を開始。じりじりと照りつけた太陽に負けじと日夜、土地の格闘を続けた。しかしくら掘れどもゴールは見えたくない。

このころ既に5年の歳月が経過。伊勢湾台風と第三室戸台風に遭遇し、3人を犠牲にした。つぎ込んだ私財は約数億。開発のために富山の自宅も手放した。

「心も肉体もすべてをかけたがダメだった。これで終わりか」と諦めかけた8月。1・540メートルの地底から60余℃の熱湯が姿を現したのだ。

## レジャー・テーマパーク誕生 国内外有数のテーマパーク誕生

東京オリンピックが開催された昭和39年。敷地面積3万3,058平

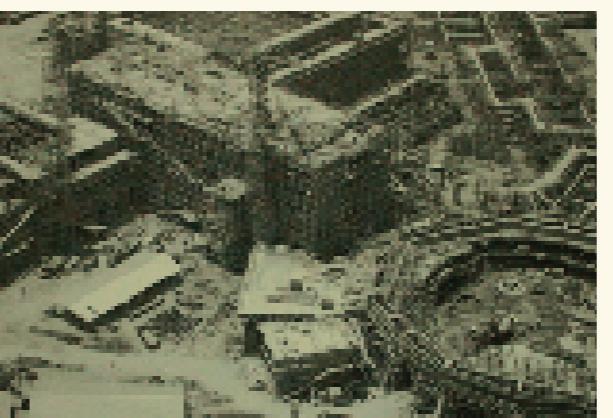
熱湯噴出のユースは瞬く間に広がり、各地から人々が見物に訪れた。50坪ほどの無料浴場を急遽建設し、一般に開放。父子の描いた夢が現実へと動き出す。行政や地元企業からの理解・援助を受けた後、昭和38年11月、佐々部晚穂(中部日本放送締役)が社長に就任し、長島觀光開発株式会社が設立。一大リゾート地の開発が始まった。

翌年2月にスタートした建設工事には、9万5,000人と1日あたり300台のコンクリートミキサーを動員。同年10月の完成を目指し、3人を犠牲にした。つぎ込んだ私財は約数億。開発のために富山の自宅も手放した。

「心も肉体もすべてをかけたがダメだった。これで終わりか」と諦めかけた8月。1・540メートルの地底から60余℃の熱湯が姿を現したのだ。

方メートル、建築面積7,176平方メートル、総工費30億円の「グランスパ長島温泉」が11月11日に開業する。広大な敷地には温泉の他、娛樂施設を完備。なかでも注目を集めたのは、2,000人が入浴可能な直径50メートルの円形大浴場だ。熱帯林を周囲にあしらった浴槽の中央には、音楽に合わせて湯を吹き出すカラー噴水を設置。

異国情緒漂う中人々は日頃の疲れを癒した。翌月には政府登録国際観光ホテル「ホテルナガシマ」をオープン。近県のみならず、東京・大阪からも観光客が訪れた。



上:服部知祥(左)と大谷伊佐 下:建設中の様子。オープンに向けて急ピッチで工事が進む

時は高度経済成長期。余暇を楽しむ風潮が高まる中に誕生したレジャー・センターは開業から3ヶ月で、75万の人出を集めた。芸能人による演芸ショーや更なる人気を呼び、五月みどりや北島三郎、三波春夫ら有名歌手が舞台に立つた。

ビートルズの来日に列島が熱狂した昭和41年、工費3億円をかけた「スパーランド」「シーサイドプール」がオープン。昭和53年には伊勢湾の海水を浄化利用する「ジャンボ海水プール」が誕生し、波の立つサーフィンプールや全长300メートルのスプールなど8種類を備えた。

## 水プールなど8種類を備えた。 絶叫マシンといえばナガシマ ホワイトサイクロン誕生

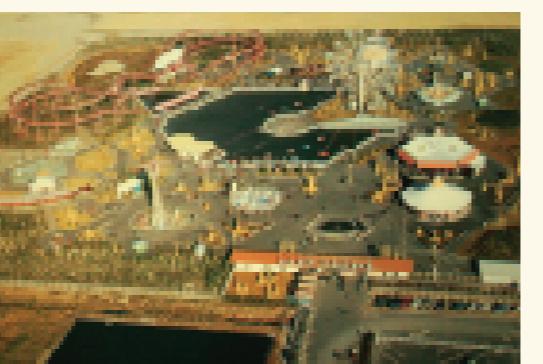
昭和末期～平成期に入ると、様々な顧客ニーズに応えた開発が進む。昭和63年、約930人が宿泊可能な「ホテル花水木」をオープン。国際会議用として同時通訳装置を備えたコンベンションホールや結婚式場、飲食街を併設する本格的なシティ&リゾートホテルが誕生する。

10～20代のファン獲得を目指し、無重力状態が体感できる「ウルトラツイスター」「スパーランド」やスクランブルスライダー(ジャンボ海水プール)を新設したのは平成元年。平成5年には、世界最大級の木製コースター「ホワイトサイクロン」の建設を発表し世間から注目を浴びた。

## 顧客ニーズに応え 変化するナガシマリゾート

「家族全員が楽しめる場を提供したい」という思いは、創業以来変わません。消費動向や流行をチエックし、利用者の声に耳を傾けることこそが重要です」と話すのは長島觀光開発株式会社企画宣伝課の池田豊さん。これまで若者やファミリーが集客の大多数を占めていたが、

平成10年の「なばなの里」オープンにより、高年齢の客足がアップした。8年前からワインターリルミネーションをスタート。美しい音色に合わせて移ろう光の競宴は、若いカップル



上:工費3億円をかけた遊園地スパーランドのオープン当初の様子(昭和41年)、下:ジャンボ海水プールのサーフィンプール(昭和53年)



上:工費3億円をかけた遊園地スパーランドのオープン当初の様子(昭和41年)、下:ジャンボ海水プールのサーフィンプール(昭和53年)

店が軒を連ねている。また、年々増加する外国人観光客に対応すべく、多国語対応の案内看板を設置。中部国際空港利用者の呼び込みに成功している。

「子どもとお父さんはナガシマスパーランドへ、お母さんはジャズ・ドリームでショッピング。おじいちゃんおばあちゃんは、湯めみの島でのんびり…と世代を問わず楽しめるのがナガシマリゾートの特長。幕の内弁当のよう、それぞれが好きなモノをぎゅっと詰め込んでいます」と池田豊さん。

高齢化・少子化などにより、レジヤー志向の多様化が進む近年。テーマパークが倒産に追い込まれるケースも少なくない中、「ナガシマリゾート」は年間1,300万の来場者数を誇る。誕生から47年。その歴史は顧客満足度アップへの挑戦と共にある。



人気を誇った円形大浴場(昭和42年)

融合が見事なホワイトサイクロンは全長1・715メートル。レールの鉄板とボルトを除きすべてが木製で、硬度に優れたサザンイエローイングを採用している。翌年運転を開始。45・5メートルの高さから一気に降下し、最高時速102キロメートルで駆け抜けるスリルが人気を集め、連日2～3時間待ちの行列ができた。近年、ジャイアントフリスビー やスチールドローンなどが加わり、アトラクションの充実を図る「ナガシマスパランド」。絶叫マシンのメカカとし

て富士急アーランドと共に人気を集め、「東の富士急、西のナガシマ」と例えられるまでになる。



ライトアップされたホワイトサイクロン